

再度の空襲で、東京一帯が焼け野原となり、そして、敗戦を迎えた時、「これから私は、一体どうしたらよいのだろうか」と、思い悩んだ人がいた。その人は、東京の地図を眺めながら、戦前、なぜ銀座があのように繁栄したかについて考えた。隅田川の流れ、鉄道の線路、東京湾の位置……これらの中心が銀座四丁目辺りになる。地図を眺めながら、その人の考えは次第にまとまっていった。誰が何といおうといかに時代が変わろうとも、やはり銀座は東京の中心になるだろう、と。ここで商売をしたいものだ。

当時、銀座はすっかり焼け野原で、地主が誰なのか、サッパリわからない。苦心の末、ようやく、彼が目をつけた土地は、安田銀行と有名な佐野屋足袋店が所有していることがわかった。

安田銀行は別として、佐野屋の主人は亡くなり、老未亡人が実権を握っている。その人は、せつせと老未亡人のところへお百度を踏んだ。しかし彼女は頑固一徹で、「いいえ、あなたが何とおっしゃっても、先祖代々のこの土地を手放すわけには参りません」と首をタテに振らない。しかし、その人はあきらめなかった。こうなれば持久戦だと思っただけがあると、日参した。が、何度行っても、答えは同じであった。

敗戦の翌年の、めずらしく大雪の振った日のことである。「こんな日に行けば、あるいは、彼女も私の熱意にほだされて……」と、思い、彼女を訪ねた。すると、老未亡人は、あまりにも気の毒に思ったのか、「では明日までもう一度考えてご返事しましょう」といった。「おや、少し脈があるな」と彼は思った。

翌日のことである。当時、彼は浅草橋の焼け残ったビルに事務所を持っていた。正午近くになって、「あの、お客様が……」という女子事務員に手を引かれるように佐野屋の老未亡人が彼の部屋に入ってきた。交通の便が悪く、ましてや、タクシーもない時だったので、彼女は雪の中を難行苦行しながら、歩いてきたらしい。

「ああ、いらっしやい！」と彼女を迎え入れると、「おやッ！」と思うほど、彼女は明るい表情をしていた。いまだかつて、彼に微笑を見せたことのない彼女が、ニコニコとしながら、「実は、今日はキッパリとお断りするつもりで伺ったのです……が、今ほん

がら、ようやくこのビルに辿りついた。

すると、受付にいた女子事務員が、「いらっしやいませ！」と声をかけてくれた。

どこの誰ともわからない老婦人が、汚れた高下駄で事務所に入ることをつたえているのを見て、彼女は自分の履いていたスリッパを脱ぐと、彼女の前にそろえ、彼女自身は、はだしになりながら「どうぞ、お履き替えください」といって、娘が母をいたわるように体をかかえながら階段をあげた。この瞬間、老未亡人は嵐のような感動に打たれたのだという。

敗戦後のとげとげしい世の中で、誰もが自分のことばかり考えて、「人はひと、我はわれ」と、思いやりも愛情も、どこかへ吹きとんでしまったと思っていたのに、こんなに美しい心の女性がいた。敗戦日本の一角に、こんなにいるわしい女性がいたことに、心から感動したのである。

そして、「すばらしい女子事務員の教育ぶりを見て、ここの社長なら無条件で信用できる。土地を手放しても、ご先祖様にも喜んでもらえる」と考えたのである。さらに売買の条件も、希望する条件でよいとまで、いつてくれたのだ。

老未亡人の心を動かした「その人」の名は、(株)リコーの社長をされた、市村清さん。市村さんはこの時の感銘に因んで、

- 一、人を愛し、
- 二、国を愛し、
- 三、仕事を愛そう

ということと社名を「三愛」と命名した。

った。

ここに、応接の神髓が語られている。会社を訪れる人は、みな、大事なお客様、その人々に人間としての限りない愛情とまごころを持って接する時、その応接が社運を決する大きな力を発揮する。

そしてまた、こういう社員を育て上げた社長も、すばらしい。会社としては、すべての人をこういう社員に育てたいものである。

現在、地価は低下の一途を辿りつつあるが、それでも今この土地を求めようと思っても、そうやすやすと手に入るものではない。この会社は、仮にそこに本社を構えなくとも、立派な業績を収めたかもしれないが、そこに本社があったからこそ、成り立った商売もあったことであろう。

その会社の命運を決めたのが、受付嬢の親切な対応にあったところに、私は何ともいえないドラマを感じるのである。